

乗雲

寺報
第74号

H21.2.10 発行

編集人

〒959-2646 新潟県
胎内市西栄町 2-8
TEL0254-43-2419
FAX0254-43-4560
広蔵寺
住職 神田英俊

メール
otera@kogonji.jp

お釈迦さまの国へ

涅槃会にちなみ

もう二四年も昔のことになりました。大本山永平寺の修行から中条へ戻ったのが昭和五五年の秋、その翌年の二月、当時の永平寺七六世秦慧玉禅師様が団長を務める「インド祇園精舎の鐘落慶法要」に参加できるご縁をいただきました。二月十一日成田空港を出発、バンコクを経由してネパール、北インドに点在するお釈迦さまの聖跡を巡拝する十一日間の旅でした。

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり」と平家物語の冒頭に謳われてはいるが、バルランプールの精舎跡には梵鐘がなく寂しいかぎりでしたが、昭和五二年に浄財を募り、インド政府の協力によって四年後念願の梵鐘と鐘楼堂が建立され、その撞き初め式に参列できるという好縁でありました。また四大聖地（生誕の地ルンビニー、お悟りを開かれたブダガヤ、初めて教えを説かれたサルナート、こ

入滅の地クシナガラ）始め、お釈迦様が説法して回られた大地を直にこの身体で、歩いて、肌で感じてまいりました。

インドは不思議な国、カルカッタ空港から降りた時の気候風土の違いによる何とも言えない匂い、牛が車を止めて道路を横切り、路上にはやせ細った裸足の子ども、物乞いの人等、貧しい人が溢れている。二月十六日早朝ベナレスの聖なる河、ガンジスでヒンズー教徒の沐浴風景を見学、河に面したところに水の増減に合わせた石段があり沐浴場所になっている。洗濯する人、水を飲む人、浸かっている人、その河岸には火葬場があり煙が立ち昇る。傍らには順番を待つ死骸が放置されていた。焼



かれた後ガンジス河に葬られ、火葬もままならぬ屍は河へ流される。その光景はあまりに強烈で驚くばかり、ヒンズー教、カースト制度、貧富入り交じった暮らし、その中でのお釈迦様の布教活動は想像を絶するほどの難しいものであったらうと推測されます。

お釈迦様は二九歳で出家、六年間の苦行の末お悟りを開かれ、その後四五年間インドの各地を旅しながら説法を続けられ、八〇歳でご入滅なされております。

二月十六日夕方クシナガラに到着する。お釈迦様涅槃の地、ここにビルマの仏教徒大菩提会が建立した涅槃堂があり堂の周りには沙羅の木が生い茂る。室内には全長七、八メートルのお釈迦様が頭を北にし、お顔を西に向け、右脇を下にし右手は頭の下に当て、両足を重ねて臥している。金色のお顔だけが見えて他は大きな茶褐色の袈裟で覆われていた。お参りのご寺院方十数名で観音経を誦し一般在家の方々も混じって合掌にて釈迦涅槃像を巡る。まさにご入滅の大地、沙羅樹の下、お涅槃図の情景そのままが脳裏に浮かび感涙ひそかに衣襟をひたす。

灯明とし、私の教えてきた法を灯明として生きなさい」

(自灯明法灯明)

とお言葉を残され、二月十五日満月の夜、多くの弟子たち、沢山の動物、生き物等に囲まれて最後を迎えられております。仏弟子としてお釈迦様の国へお参りできたことは無上の喜び、法幸至極、まさに仏縁でした。仏恩報謝は少しでも多くの人に教えを広めていくことと肝に銘じております。

(法句経九六)

「こころしずかなり、語(ことば)おだやかなり、行いもゆるやかなり、この人こそ正しきさとりを得、身と心の安らぎを得たる人なり」

法句経は全部で四二三偈、お釈迦様の示した法話を歌の形にしてまとめたもので、真実の言葉で綴った句集です。その中の感銘深い一偈を紹介しました。

現代はあまりに落ち着きのない殺伐とした不安だらけの世の中ですが、少しでもお釈迦様の教えに学び実行し心を豊かにすることが報恩の道と心得ております。願わくは再度(チャンスがあれば)仏の国へと思っております。ちなみに我が生涯の伴侶は有難くもインド仏縁にて。

住職合掌
文芸中条三二号より(平十七)